

編集後記

平成30年度の石川県立看護大学年報をお届けいたします。前年までの様式に倣い、1年間の本学教員の活動を記録しています。創立20周年を目前に控えて、学部カリキュラムの改定内容が確定し、委員会構成も一新するなど大学運営の見直しが行われた年でした。各委員会では校務負担の軽減をねらいとして人員がスリム化されました。世代交代を見据えて選出された若手各委員長のもと、これまでの活動を継承しつつも様々な新規取り組みが試行されてきたように見受けられます。具体的内容については本誌をご参照ください。

国際交流活動としては夏期アメリカ看護研修に加えてタイ国立チェンマイ大学看護研修も軌道に乗り、韓国看護研修とともに単位化が検討されました。夏にはワシントン大学ドーレンボス教授を招聘しましたが、大学院生を中心に丁寧な指導を受け、講演を通して科学的思考を学ぶなど、研究活動にも大きな示唆を与えられる貴重な機会となりました。

また助産師養成課程が始動したことも大きな出来事でした。研究を志向する若い大学院生の増加は本学の教育体制にも新たな変化の可能性をもたらします。開校年である平成30年度以降、学生の熱意に応えるべく担当教員が日々奮闘されていますが、より多くの教員が何らかの形で関与する機会を設けることが望まれます。

一方で公立小松大学、富山県立大学看護学部の相次ぐ開校が本学の受験志願者数にも大きく影響した年でした。厳しい現実を直視し、今後も県内外の優秀な生徒を迎えるために、本学の魅力や強み、課題について改めて捉え直すことが求められます。

この年報がお手元に届くころ、時代は令和を迎えています。社会情勢は平成から地続きで変化しています。消費税は10%への増税が強行されようとしています。教育界隈においては、大学入試改革の行方は予断を許さない状況が続く、競争を前提とした文教政策の成果についても疑問の声が広がりつつあります。大学、あるいは所属教員が自身で考え、意見を表し、行動することでプレゼンスを発揮する流れが来ています。このような時代の中、われわれ石川県立看護大学の教員も、本学の目指すべき姿、目標や理念について見つめなおすとともに、広く意見を交換し、多様性を認めつつも一体となって課題に取り組んでいくことが本学の発展につながるものと考えます。

本誌の編集にあたり各委員会、附属地域ケア総合センター、附属図書館、附属看護キャリア支援センターの皆様から多大なご協力を頂きましたことにお礼を申し上げます。また実質的な作業を担った平村主任主事をはじめ、松原委員、川村委員、曾根委員にその労をねぎらいたいと思います。皆様のご協力に感謝申し上げます。

2019年9月吉日 自己点検評価委員会 年報編集部会長 市丸徹